

令和7年度 福井県立奥越特別支援学校 学校評価書

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
<p>【図書研究部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>	<p>教育課程・学習支援</p>	<p>今年度は「主体的な学びを支える授業づくり～多様な学びを尊重する集団活動へ～」を研究テーマに掲げた。福井県特別支援学校教育研究会の分科会で実践発表を行った小学部の研究をはじめ、各学部において、子どもの多様な学びの姿を複数の教師で見取り、支援の在り方を検討するという共通の視点を持って研究を進めることができた。主体的な授業づくりへの肯定的な回答は多く、特に「7割以上できた」とする教員が昨年度に比べ約10ポイント増加したことに、一定の成果が表れていると思われる。同学部内での関わり度合いの高いグループ編成による実践的な研究が、教職員の確かな実践力の向上に寄与したといえる。</p> <p>一方で、保護者や高等部生徒の肯定回答は9割を超える高水準を維持しているものの、教職員の手応えの伸びに比べると横ばいや微減の傾向にある。教職員側の実感が必ずしも児童生徒本人の「自ら考え、表出できた」という強い実感に結びつききれていない点が課題である。今後は指導の充実を、生徒の自己成長感と保護者の実感に繋げていく方策が求められる。</p>	<p>これまでの研究の方向を継続しながら、児童生徒が自らの成長を実感できる仕掛けづくりも推進していきたい。具体的には、子ども自身が「これができるようになった」と実感できるよう、振り返りを含めた子どもとの「対話」から自己肯定感を引き出していくこと、また、普段の学びの様子を積極的に発信する機会を大事にし、家庭でも子どもの成長を話題にできる環境づくりなどにも考慮しながら研究を進めていきたい。</p> <p>あわせて、教員間で「主体性を引き出す仕掛け」の具体例を共有し、校内全体の知見を蓄積することで、より幅の広い子どもの実態に合わせた教育活動を展開していきたい。これらの取り組みを通じ、個別のニーズに応じた支援と集団での授業づくりの両立を追求し、子どもたちが主体的に、楽しく充実した学校生活を送れるよう研究と実践を深めたい。</p>
<p>【小学部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、児童が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>		<p>今年度も、一人一人の多様な学びを大切に実践を行った。昨年度に引き続き学部全体で行う授業を複数設定し、学部の教員全員で児童の主体的な学びを引き出せるような実践を行った。授業後には、児童の様子について丁寧に振り返りを行い、支援の方法や環境設定などを見直ししながら、授業改善を行った。8月には、「一人一人の多様な学びを大切に実践～子どもの思いに寄り添った支援の工夫～」というテーマで福井県特別支援学校教育研究会の分科会を行った。分科会では、研究対象授業の遊びの指導（合同遊び）と生活単元学習（誕生会）の実践を発表した。この分科会を通して、参加者の他校の教員と児童の主体的な学びの姿について協議をし、本校での実践に活かすことができた。</p> <p>京都方面への修学旅行や校外学習など、積極的に校外に出て活動ができ、児童にとって多くの気付きや経験を重ねることができた。しかし、医療的ケアを必要とする児童の宿泊を伴う活動については課題が残っている。</p> <p>交流および共同学習においては、居住地校交流を希望するほぼ全ての児童が、相手校に行き、居住地校交流を行うことができた。交流では、日頃頑張っていることを相手校の児童に発表したり、お互いにやりとりをしたりしながら活動ができ、同年代の友達と関わる経験を広げることができた。</p>	<p>今後も引き続き、児童の「好きや得意」をきっかけにして、児童自身がやりたいことを見つけ、それを広げていけるような授業作りに取り組んでいきたい。集団活動中での児童の行動や思いの変化を丁寧に見とりながら、児童の主体的な学びの深まりを支援していきたい。</p> <p>また、今後も、児童の経験を広げていくために、校外での活動を積極的に取り入れていきたい。医療的ケアを必要とする児童の校外での活動については、安心・安全に実施するための方法を保護者や主治医、関係機関と相談しながら考えていきたい。</p>
<p>【中学部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>		<p>今年度の中学部の研究では、「多様な学びを尊重する集団作り」というテーマのもと、授業検討会を行った。検討会では、授業の進め方や授業者へのアドバイスをまです論じるのではなく、生徒の学びの様子を丁寧に見取り共有する時間を大切にしてそこから授業改善へ繋げていくという実践の進め方にこだわって取り組んだ。対象となる生徒の記録動画を全員で視聴し、生徒の行動とその因果関係を一人一人が付箋に記述して、意見交換を行った。一見、すぐ集団から逸脱したりやる気がないように見えたりする生徒の様子も、その行動や言動、表情、視線を細かく観察し、その背景を考察し合うことで、学びに向かう様子があることに気付くことができた。そして、それぞれの子にとっての集団で学ぶ意味や授業改善のアイデアについて多く語り合うことができた。生徒間でも教員間においても、多様な学びを尊重する居心地の良い集団形成への意識が生まれており、研究の場にとどまらず日ごろの生徒理解や授業改善へと生かす仕組みづくりが今後課題である。</p> <p>今年度も、地域の人々との交流や地域資源を活用した学習機会を積極的に取り入れた。生活単元学習では「奥越を知ろう」と題し、勝山大野の観光名所や特産物を調べ校外学習に出かけた。居住地校交流や学校間交流、高齢者施設との交流は、昨年同様、充実した内容で実施することができた。また、キャリア教育の一環として、様々な職種の方々から実技指導を受ける機会を設定した。勝山市の縫製会社を訪問し縫製工程の見学・実習を行ったり、生花店の方に来校していただき寄せ植え作りを習ったりした。大野市の里芋農場を訪れ収穫処理体験も行った。これらの実習で、生徒は、働くことの意義を学び、作業学習の製品作りやさらに地域販売会の開催に活かすことができた。生徒は様々な地域の方との交流を通じ、地域の一員として生活し繋がっていることを知り、学習の意欲付けとなった。</p>	<p>来年度は、生徒数が増え、さらに多様な学びの在り方を尊重した集団形成が求められる。集団参加に抵抗を感じる生徒や集団の中で自己表現が苦手な生徒が少なからずおり、特にそうした生徒については、チームを組んで対応していきたい。定期的に支援会を開き、複数の目で、学びに向かう子どもの様子を見取り支援方法を探っていく、まさに今年度の研究実践の手法を大切にして取り組んでいきたい。さらに、学部全体でも情報を共有し、授業改善につながる仕組みづくりをしていきたい。</p> <p>来年度も地域の人々との交流や地域資源の活動を進めていきたい。これまで、継続して取り組んできた交流の場をさらに有意義な内容となるように工夫するとともに、教師一人一人がアンテナを張って、新たな交流の場や地域資源を探り、学びの場の広がりを目指していきたい。</p>
<p>【高等部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>		<p>本校の研究テーマを基に、高等部では、「自分の強みや魅力を生かした集団活動」のあり方について研究協議や実践に今年度取り組んできた。生徒たちの主体的で多様な学びを尊重する上で、教師たちは、環境設定や題材・教材の工夫はもちろん、生徒たちの「魅力・強み・(弱み)」を理解しておく必要がある。さらには、生徒たち自身にも「自分らしさ」を知って自己理解を深めてほしいという思いがある。そこで、高等部では、いわゆる「トリセツ(『わたしのトリセツ』)」を作ったアセスメントをとることで、もっと生徒たちに自己理解を促せるのではないかと考えた。</p> <p>この「トリセツ」を基にした授業を設定し、生徒たちが生き生きと活躍する場面の設定や仕掛けをすることで、それぞれの生徒の主体的な学びや表出を支える授業づくりを進めることができた。生徒対象のアンケートで、学習中での満足度の割合や、学校生活が楽しいとの回答の割合が高いことから窺える。</p> <p>ただ、「トリセツ」を利用した授業実践は、今年度後期からであり、生徒たちの変容の捉えや、研究としての検証、省察が不十分であり、課題であると考えている。</p>	<p>今年度の研究実践の成果をしっかりとまとめ共有し、来年度の研究実践につなげたい。</p> <p>生徒の中には、学習や生活経験の不足、人との関係作りの難しさや悩みなどから、自分からの表出が少ない生徒や自分に自信がもてない生徒が多い。高等部卒業後は、社会的自立を求められる。高等部の時期に、生徒にしっかりと寄り添い伴走しながら、本人に自己理解を促していきたい。</p> <p>授業での経験や多様な評価を通して、生徒自身が自分らしさ・強み(・弱み)を知って、人とのかかわりを広げたり、社会参画したりできるような支援を継続していきたい。</p>

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
<p>【教務部】</p> <p>地域の人的・物的資源を活用するための新しいかたちを取り入れながら、教育実践を行う。</p>	<p>教育課程・学習支援</p>	<p>地域の方との交流や校外での学習活動については、感染状況に留意はしつつ、ほぼ制限なく実施することができるようになった。</p> <p>小学部では、福井県文化振興事業団主催のドラムサークル体験会を行い、世界の打楽器を演奏した。また、低学年グループは大野市の畑を訪れてさつまいも収穫体験を行い、高学年グループは福井県主催のミニコンサート鑑賞会へ参加しフルートやクラリネット演奏を聴いた。</p> <p>中学部では、勝山市の縫製会社を訪問し、Tシャツのプリント体験をしたり、生花店の方に来校していただき作業学習で育てた花を使った寄せ植えの作り方を教えていただいたりした。また、大野の里芋農家を訪問し、地域の特産品である里芋の収穫処理体験や、里芋の加工品(煮物、アイスクリーム)の試食を通して交流した。</p> <p>高等部では、「おおの福祉ふれあいまつり」で3つの作業班が出店参加し、地域の方向けに販売活動を行ったり、「県庁セルフフェア」で高等部3年生が作業学習製品を県庁職員等に向けて販売活動を行ったりした。また、外部講師による作業学習での講習として、清水風月堂代表による調理指導(食品加工班)や福井県立大学教授によるふくこむぎの製粉(農業班)、奥越農林総合事務所講師によるカンタケ菌床プランター作り(農業班)を行っている。その他に、生徒が講師役となって、保護者に作り方等を伝える「こけ玉教室」(農業班)も実施した。</p> <p>どの学部も指導計画の中に校外での活動や地域の方とのかかわりを組み込んでおり、通信やホームページなどを通じて発信することもできている。満足度指標も高い結果となっているので、児童生徒の主体的な学びの場として、今後も地域資源の有効な活用を検討していきたい。</p>	<p>コロナ禍前の活動が可能になった中で、以前の内容をそのまま行うのではなく、教育的意義や目的、在籍している児童生徒の障がい特性等を踏まえ、よりよい形を再検討する様子が見られた。また、高等部では卒業後の生活を見据えながら、公共交通機関の利用や飲食店の利用など、進路支援の一環としての位置付けから活動内容を検討する様子も見られた。来年度も一つ一つの活動について目的を明確にしながら、より効果的な地域資源の活用を検討したい。</p> <p>また、それらの活動について、活動の様子だけでなく、その目的や児童生徒の変容についても発信することで、教育活動の理解につなげていきたい。</p>
<p>【渉外部】</p> <p>関係校務部と連携した学習会やレクリエーション行事を充実させたり、広報誌を通じて学校生活の様子を伝えたりする。</p>	<p>保護者支援</p>	<p>年度初めに計画していた活動を予定どおり全て実施することができた。家族支援に関する行事では、PTA総会当日に福井大学の笹原未来先生による講演会を相談支援部と共催で行った。今年度はPTAと相談して数年ぶりに対面での講演とした。講演後のアンケートでは、参加者の95%以上が「満足」または「やや満足」との回答であった。進路に関する行事では、進路支援部との共催で7月末にPTA企業・事業所見学会ならびにPTA学習会を実施した。PTA企業・事業所見学会では、紫水の郷とニチコン株式会社大野工場を訪問し、43名の保護者、生徒、教職員が見学をした。PTA学習会は、「就労に向けて必要なこと」と題した講演を聞いたり、卒業生の保護者2名を交えて参加者による交流会(座談会)を行ったりした。どちらか興味・関心のある内容だけの参加も可能とし、30名の保護者、教職員が参加した。PTAと協力して積極的に参加を呼び掛けたこともあって、見学会、学習会ともに昨年度よりも参加者数が増加した。また実施後には「どちらもとても良い活動なので、より多くの保護者の方に参加してもらえると良い」との感想が複数聞かれた。PTAレクリエーションは、学校祭当日にビンゴゲーム大会を行った。47家族、47名の教職員と多くの参加があり、「学校祭の楽しみの一つになっているので今後も続けてほしい」などの感想が聞かれた。同日に実施した昼食弁当販売や制服・体操服リユース販売も盛況であった。広報誌については、子どもたちの学習の様子や学校行事などをまとめ2回発行した。誌面内容に新しく保護者アンケートや教員から卒業生へのメッセージなどを取り入れ、好評を得た。</p> <p>これらの取組の結果、学校評価アンケートにおいて保護者、教職員ともに95%以上が取組を行うことができたという回答し、目標指数を上回る成果を上げた。より充実したPTA活動のために、PTAや関係校務部と協力して一つ一つの活動に丁寧に取り組んできたことが成果に結び付いたと言える。来年度もさらに多くの方に積極的にPTA活動に参加してもらえるための方法を検討していきたい。</p>	<p>PTA総会当日に行っている講演は、今年度に続いて対面で行うとともに、内容についても保護者のニーズを捉えて検討したい。PTA学習会ならびにPTA企業・事業所見学会については、高等部だけでなく小・中学部の保護者にもより多く参加してもらえるように案内方法をさらに工夫するなどして働きかけていきたい。</p>
<p>【生徒支援部】</p> <p>学校行事を学習発表や異年齢交流の機会と捉え、校外外と連携し一人一人の心と体の健康に留意しながら特性に合った参加を支援する。</p>	<p>生徒支援</p>	<p>今年度は、「学校生活において、一人一人が自主的・主体的な行動ができるように活動内容の充実を図る。」という重点目標を立て、「学校行事を学習発表や異年齢交流の機会と捉え、校外外と連携し一人一人の心と体の健康に留意しながら特性に合った参加を支援する。」という具体的取組を掲げて取り組んだ。学校評価アンケートでは、全ての教職員が「支援をすることができた」と回答した。また、94.7%の保護者が満足度指標を達成したという回答を得ることができた。</p> <p>おくえつ学校祭は昨年度からPTA販売や福祉事業所販売、午後はPTAレクリエーションなどを企画し、一昨年度までの半日開催から1日開催となったことが児童生徒や保護者にも定着しつつある。学部ごとの発表では、全ての児童生徒が参加できるよう、運動・音楽・作業販売など普段から取り組んでいる学習内容を織り交ぜた発表を各学部で企画している。参加が難しい児童生徒には、作品を展示したり事前に撮影した映像を上映したりするなど一人一人の心と体に留意しながら特性に合った取組ができるよう、各学部の教職員が支援内容を工夫し、参加を支援することができた。これらのことで保護者の満足度指標が昨年度より高くなったと思われる。</p>	<p>目標指数を80%と設定しているため、目標は達成したということになるが、「取り組んだり参加したりする姿を見ることができなかった」と回答した約5%の保護者およびそのお子さまに対して支援が求められる。</p> <p>毎年、子どもたちの障がい特性が多岐に渡っている。そのため、今後も一人一人の心と体の状態に注視し、その特性に合った取組や参加を促していく必要があると思われる。引き続き、校外外との連携を行いながら、学校行事や全校集会を学習発表や異年齢交流の絶好の機会と捉え、学校生活において、一人一人の心と体の健康に留意しながら、自主的・主体的な行動ができるように活動内容の充実を図っていきたい。</p> <p>スマートフォンの使用等、情報モラル教育について保護者と一体となって取り組みたい。</p>
<p>【保健安全部】</p> <p>感染症予防に関する情報発信や安全に配慮した環境整備・点検の啓発、保健指導・安全教育に関する教材等の紹介を行う。</p>	<p>安全管理</p>	<p>今年度は、校内で感染症の拡大ということもなく、学級閉鎖などの対応をとることはなかった。また、罹患者も年間で一桁台と少なかった。感染流行の兆しが見られた際には、感染状況の情報共有に加え、適切な感染症予防の啓発など教職員への呼び掛けを行った。8月末に奥越地区での感染症流行の兆しがあった際には、保護者へも丁寧な健康観察や夏休み明けの登校に関わる対応等についてメール連絡を行った。今後も、感染症対応の意識の定着を継続できるよう、啓発や状況に応じた情報共有、適切な対応などに努めたい。</p> <p>性教育に関して今年度は、図書教材を増やし、教職員対象の研修も企画し情報発信を行った。研修では、講師を招き具体的な実践や教材の紹介をしていただき、実際の指導につながるきっかけとなった。</p> <p>安全面に関しては、昨年度に引き続き安否確認のメール訓練や年2回の避難訓練を行った。避難訓練では、煙霧訓練や防火扉等の体験学習を取り入れた。事前学習も、児童生徒の実態に応じて、工夫して取り組んでいる様子が見られた。また、今年度は引渡し訓練を3年ぶりに実施した。学校行事と同日開催したことで、保護者の参加率は高かった。当日は天候不良で急遽保護者待機場所の変更をするなどしたが、そのような事態の対応も確認でき、保護者にも実際に見て体験してもらえたことで、有意義な訓練となった。</p> <p>これらの取組が、学校評価アンケートの結果(教職員、保護者共に、十分にできた・おおむねできたと回答した方が9割超え)につながったと考える。</p> <p>本校は、様々な障がいをもった児童生徒が通う学校であり、安全面・健康面に関しても個々の実態に応じた対応や配慮が必要である。それらを踏まえ、より安全で適切な教室環境の整備や緊急時の対応等の備えを図っていきたい。</p>	<p>今年度、有効であった感染症に関する情報共有や感染予防・感染症対応等の啓発などは、継続して取り組んでいく。連休や長期休業明けについては、特に丁寧な体調確認を行い、状況に応じてはメール等も活用し、迅速に教職員・保護者に情報発信していきたい。</p> <p>健康、安全に関する教材等の紹介については、今後は、より関心をもってもらえるように紹介の方法なども工夫していきたい。</p> <p>過去のアクシデントやヒヤリハットなどから、気を付けるポイントなどを教職員に発信し、安全な環境整備や日ごろからの安全意識の向上に努めていきたい。</p> <p>また、様々な状況を想定した避難訓練や緊急時の対応等の訓練や研修を計画的に企画し、取り組んでいくようにする。研修や訓練の実施方法も工夫し、より危機意識をもって取り組めるものにした。</p> <p>定期的に危機管理マニュアルの確認および見直しを行っていききたい。</p>

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
<p>【相談支援部】</p> <p>居住地校交流、学校間交流、地域交流において、工夫や検討を重ねながら取り組む。</p>	<p>校内・地域支援</p>	<p>今年度、居住地校交流については、小学部では約8割にあたる14名の児童が、中学部では約3割にあたる3名の生徒がそれぞれの居住地にある学校で交流を行った。本校の児童生徒が相手校に出向いたり、相手校の児童生徒が本校に来校したりして対面する形で行う直接交流やリモートで相手校と繋がったり、作品交流をしたりする間接交流をうまく組み合わせ、一人一人の実態やニーズに合わせた交流の形を探ることができた。居住地校交流を行っている児童生徒の多くは本校入学当初から継続して交流を重ねており、同じ地域に生活する仲間であるという実感を深めている。また学校間交流については、中学部で実施し、市内中学校との交流を深めた。地域交流については、全ての学部で実施することができた。特に高等部では、年間を通して地域の企業や講師講習などの交流が行われた。年間を通して地域販売会を開き、生活単元学習、作業学習、自立活動などで作った製品を地域の方に直接販売した。児童生徒は交流を通して大きな喜びを感じ、地域の一員としての意識を高めることができた。</p> <p>学校評価アンケートにおいても、約9割の保護者が、本校の交流及び共同学習(居住地校交流・学校間交流・地域での活動等)について、児童生徒が参加する様子を知ることが、十分またはおおむねできたと回答している。そのなかでも十分できたと回答している保護者の割合が約6割と昨年度までと比較しても、満足度が上がっていると言える。保護者懇談や学部だよりなどを通して、交流及び共同学習の様子をできるだけ速やかにかつ丁寧伝えてきたことの成果だといえる。今後も交流及び共同学習で繋がることのできたそれぞれの縁を大切にしながら、交流の内容を一人一人に合わせた形で充実させていき、さらにその様子や成果を保護者や地域へも発信し続けることが必要である。</p>	<p>本校の児童生徒や相手校の児童生徒、地域の方の実態やニーズに合わせた交流及び共同学習の在り方を探っていく。今後は交流を通して得られた気付きやお互いの変容を成果として共有し、さらなる交流の充実を目指していきたい。また、これまでの交流及び共同学習で繋がった縁を大切にしていくと同時に、児童生徒の実態やニーズに合わせた新たな交流先の開拓を継続して行っていく。さらに、保護者懇談、学部だよりや交流通信「あしあと」などを活用し、様々な方法で児童生徒の交流及び共同学習の様子や成果を保護者や地域へ積極的に発信していきたい。</p>
<p>【進路支援部】</p> <p>職場見学や現場実習の巡回同行等を通して収集した情報を教職員間で共有し、卒業後の生活を意識した支援を行う。</p>	<p>進路支援</p>	<p>7月から奥越地区に新たな就労継続支援B型事業所が開設された。仕事内容はパソコンの解体などのリサイクル関係中心で、奥越地区には今までなかった内容である。夏季休業中に高等部で希望者を募り、見学に行った。また、写真等で事業所の様子を共有した。現場実習での評価を保護者や本人に伝え、校内でも共有し、今後さらに伸ばしていくと良い点やもう少しがんばってほしい点など一人一人に応じた支援を行うことができた。</p>	<p>今後も職場見学や現場実習を通して実習先と情報交換を行い、一人一人に応じた支援を行っていきたい。</p> <p>高等部だけでなく、小・中学部の教員にも、PTA企業・事業所見学会や学習会への参加を促し、事業所の作業内容や雰囲気を知る機会を設けて、将来を見据えた進路支援を働きかけていきたい。</p> <p>新しい制度が始まったこともあり、「進路のしおり」の見直しを行い、より分かりやすく情報を掲載していきたい。</p>